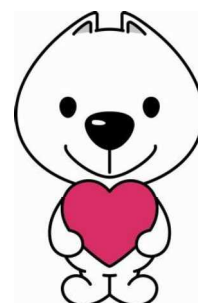


# 新型コロナウイルス感染症 県内発生状況・その3

---

令和2年8月7日

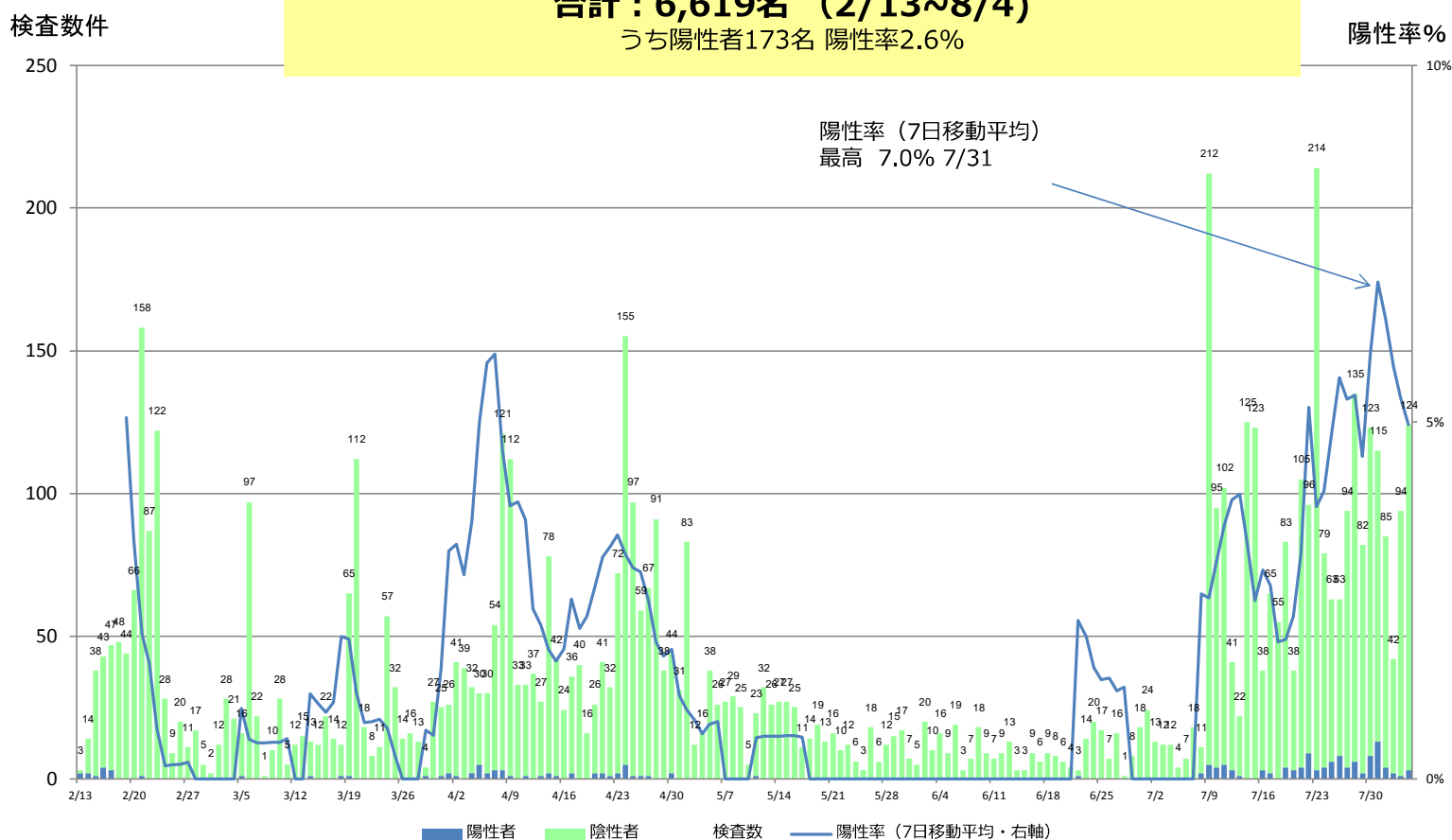
和歌山県福祉保健部技監  
野尻 孝子



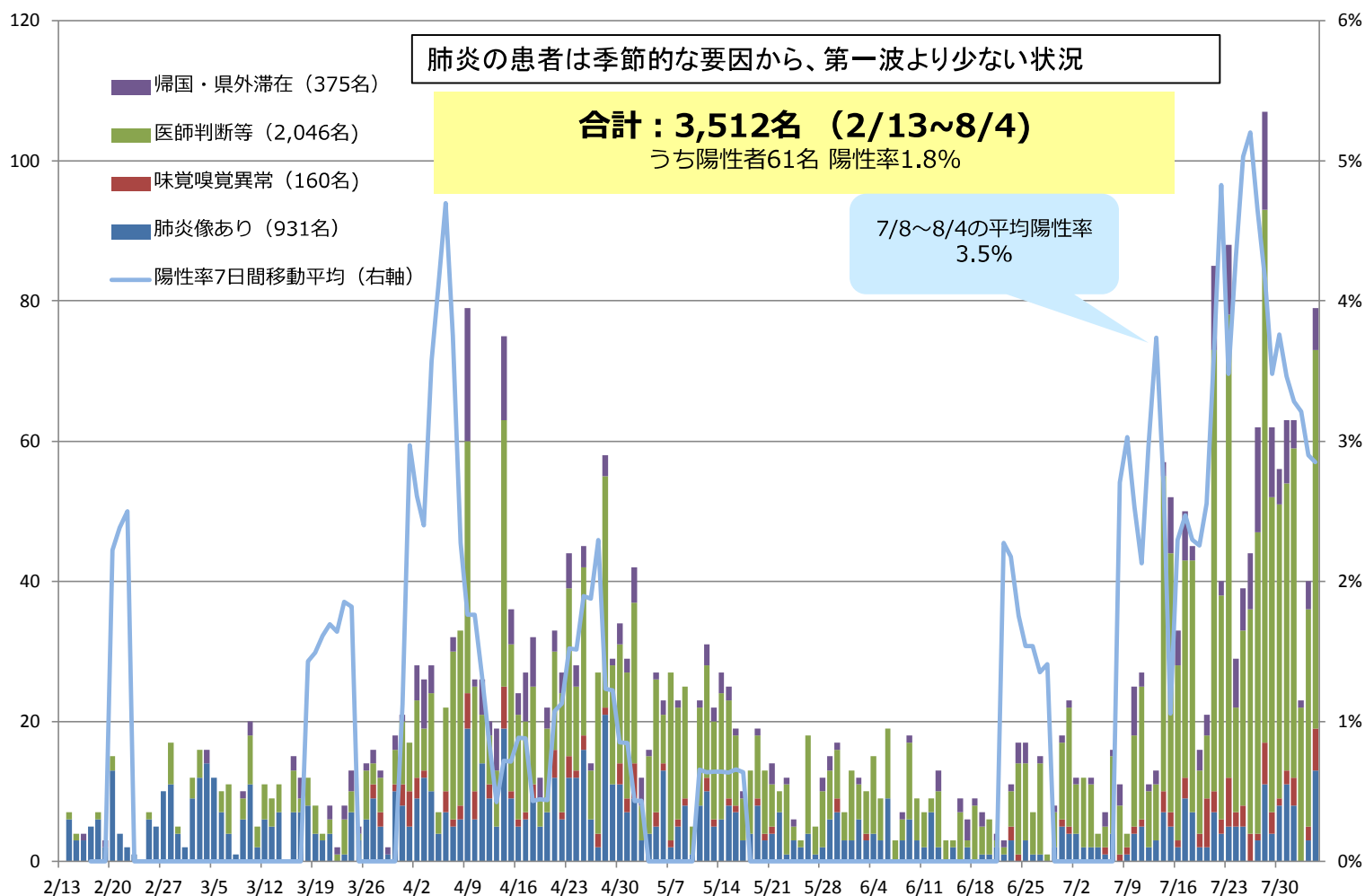
# ① 県内の新型コロナウイルス検査数と陽性率の推移

7月に入り、検査数が増加しましたが、感染者数も増加したことから、陽性率が高くなった

合計：6,619名 (2/13~8/4)  
うち陽性者173名 陽性率2.6%

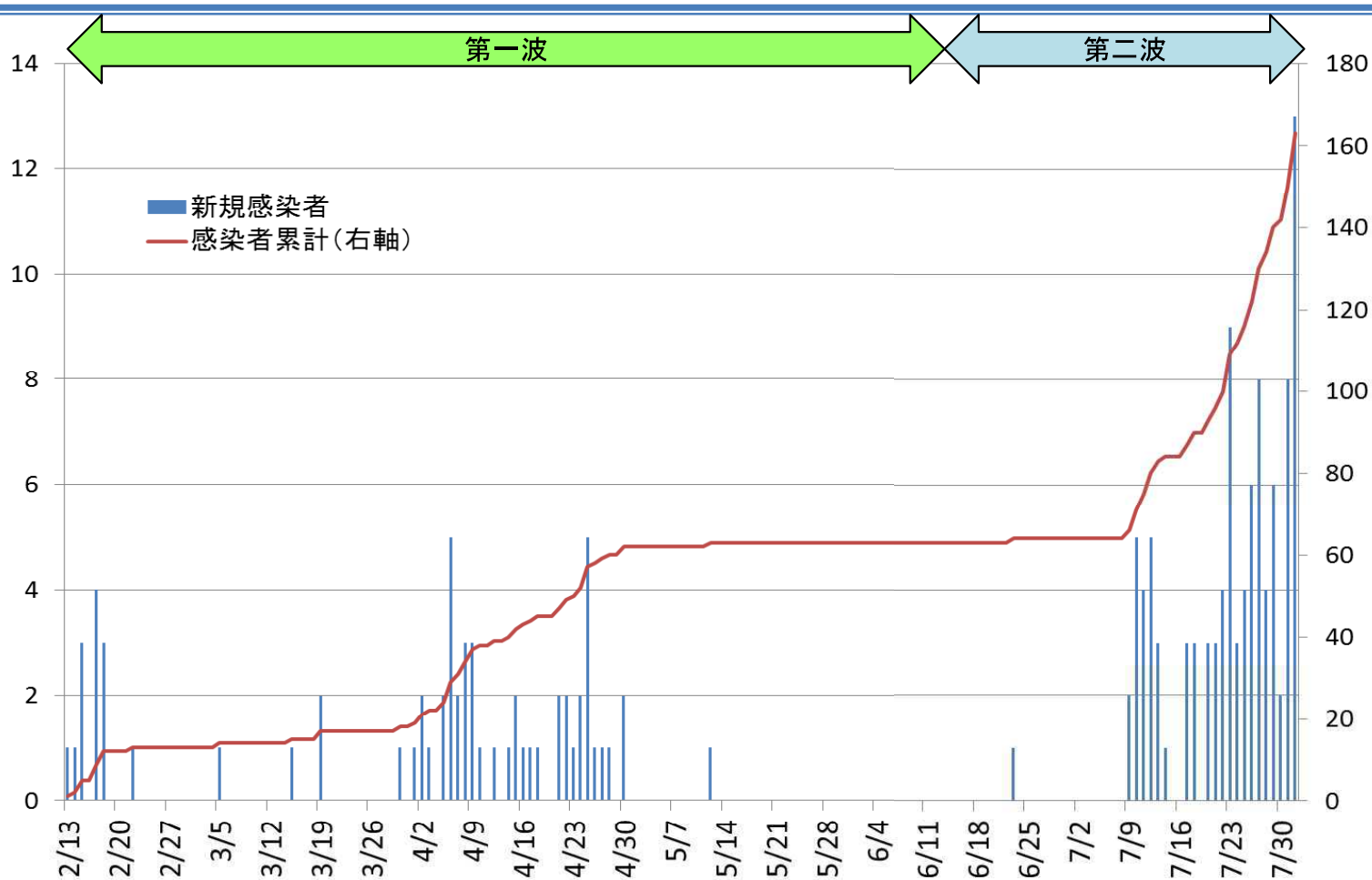


## ② 肺炎・発熱等患者の検査の状況



### ③ 感染者数の推移

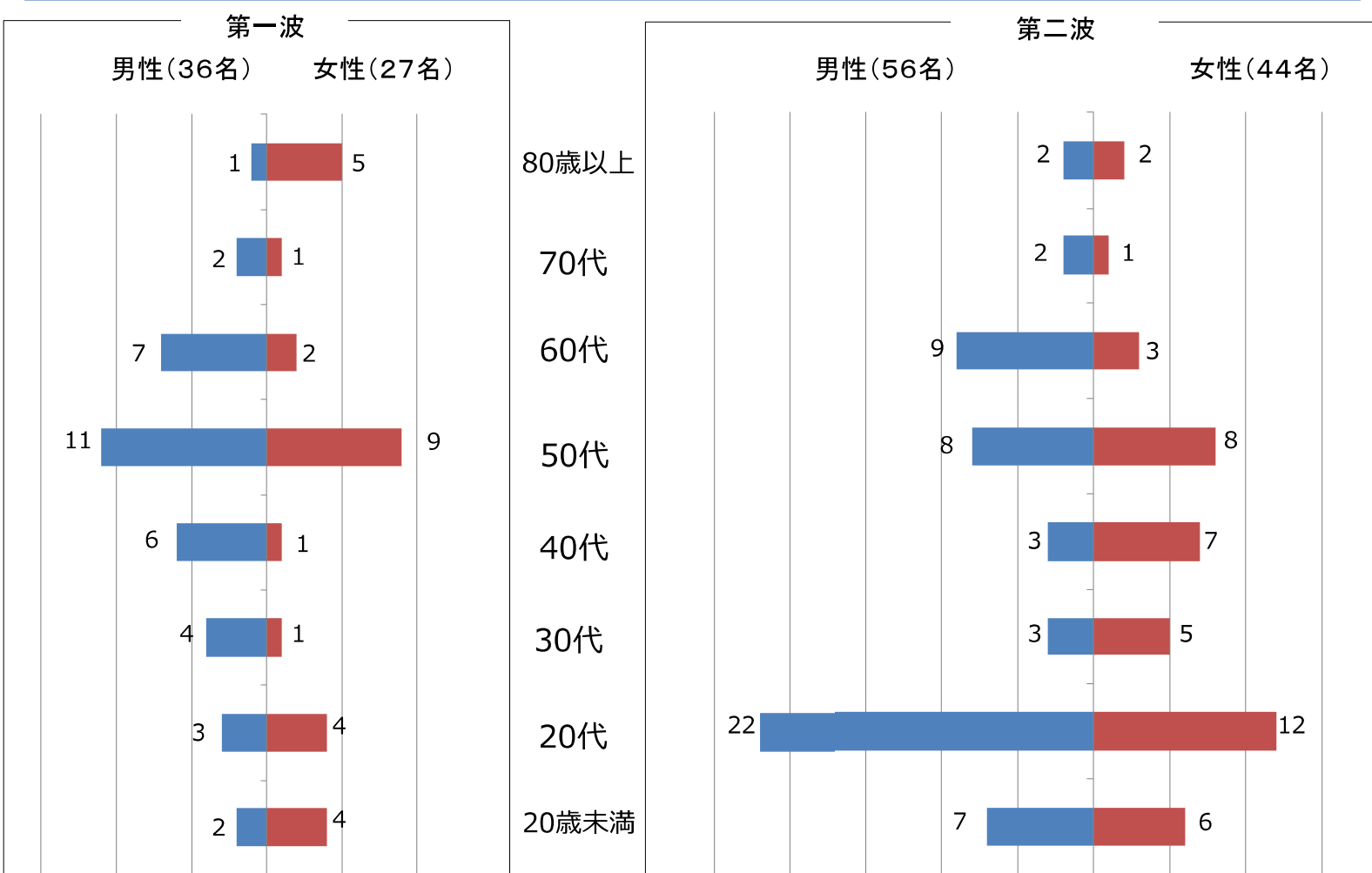
令和2年7月末判明(8/1発表)分まで  
(163件)



7月に入り、新規感染者数は急増しています。7月31日には、一日の感染者数が13名とこれまでの最高となった

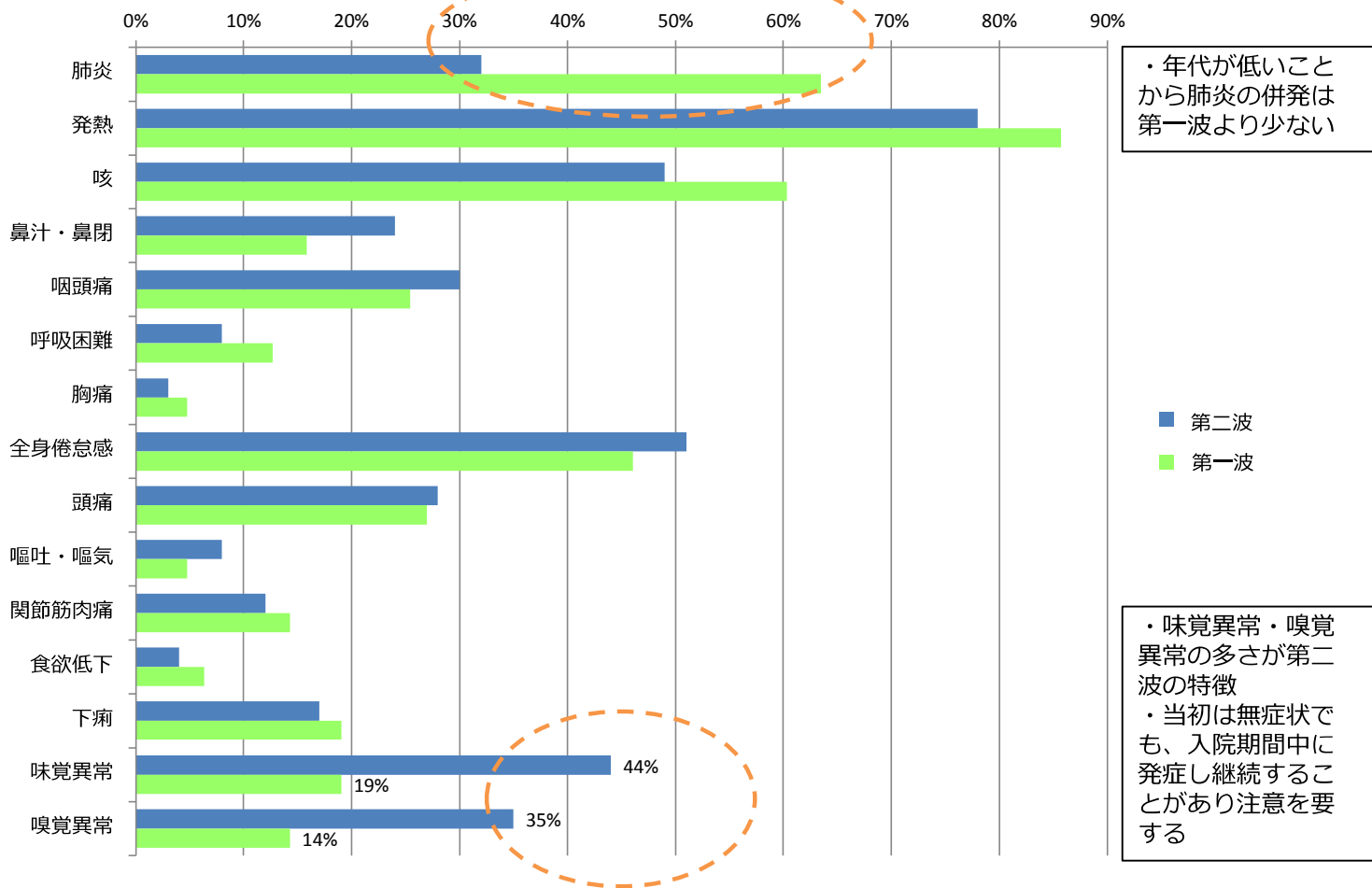
## ④ 年齢と性別

令和2年7月31日までの  
検査で判明した163人を対象



第一波では男女とも50代が中心であったが、第二波では20代の若者が中心となっている。とくに男性の感染例が多い

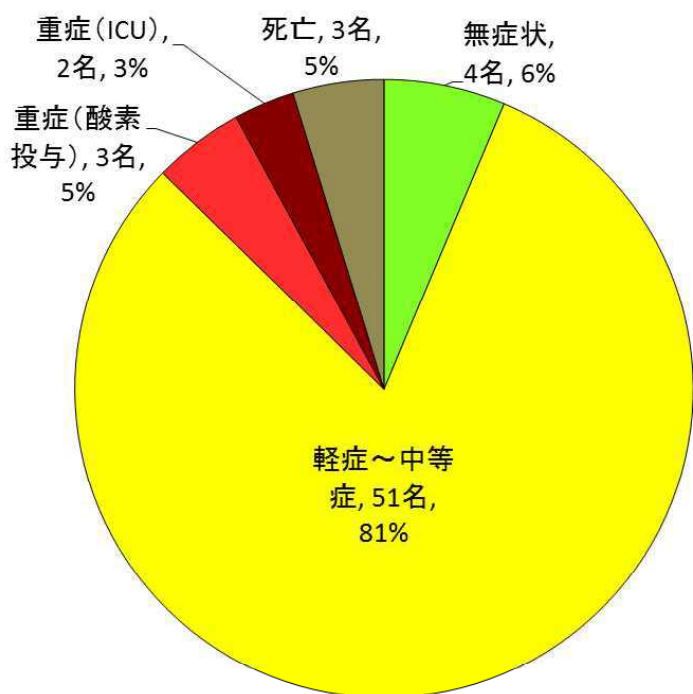
## ⑤ 症状



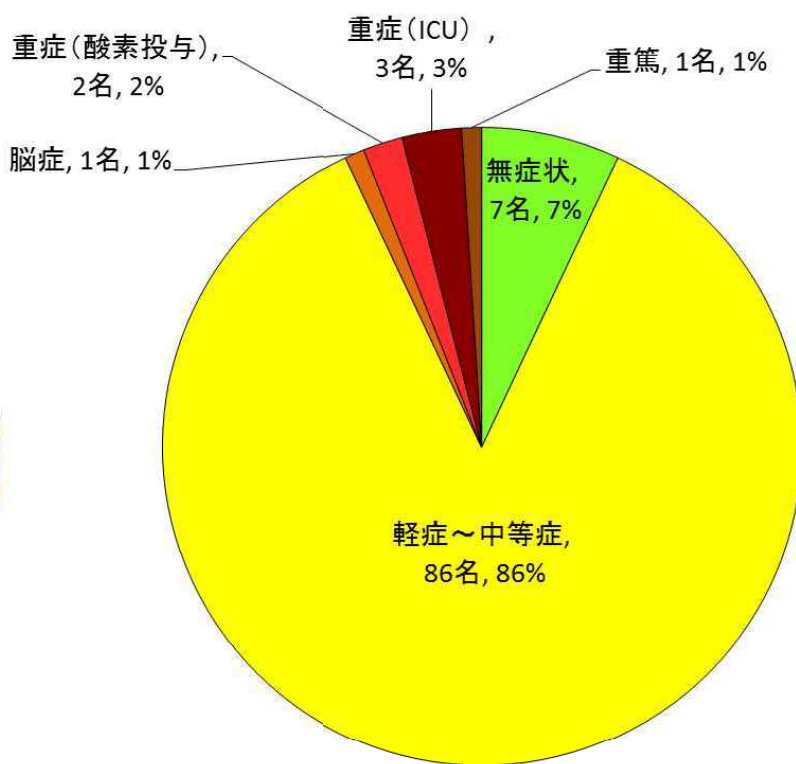
## ⑥ 重症度

令和2年7月31日までの  
検査で判明した163人を対象

【第一波】



【第二波】

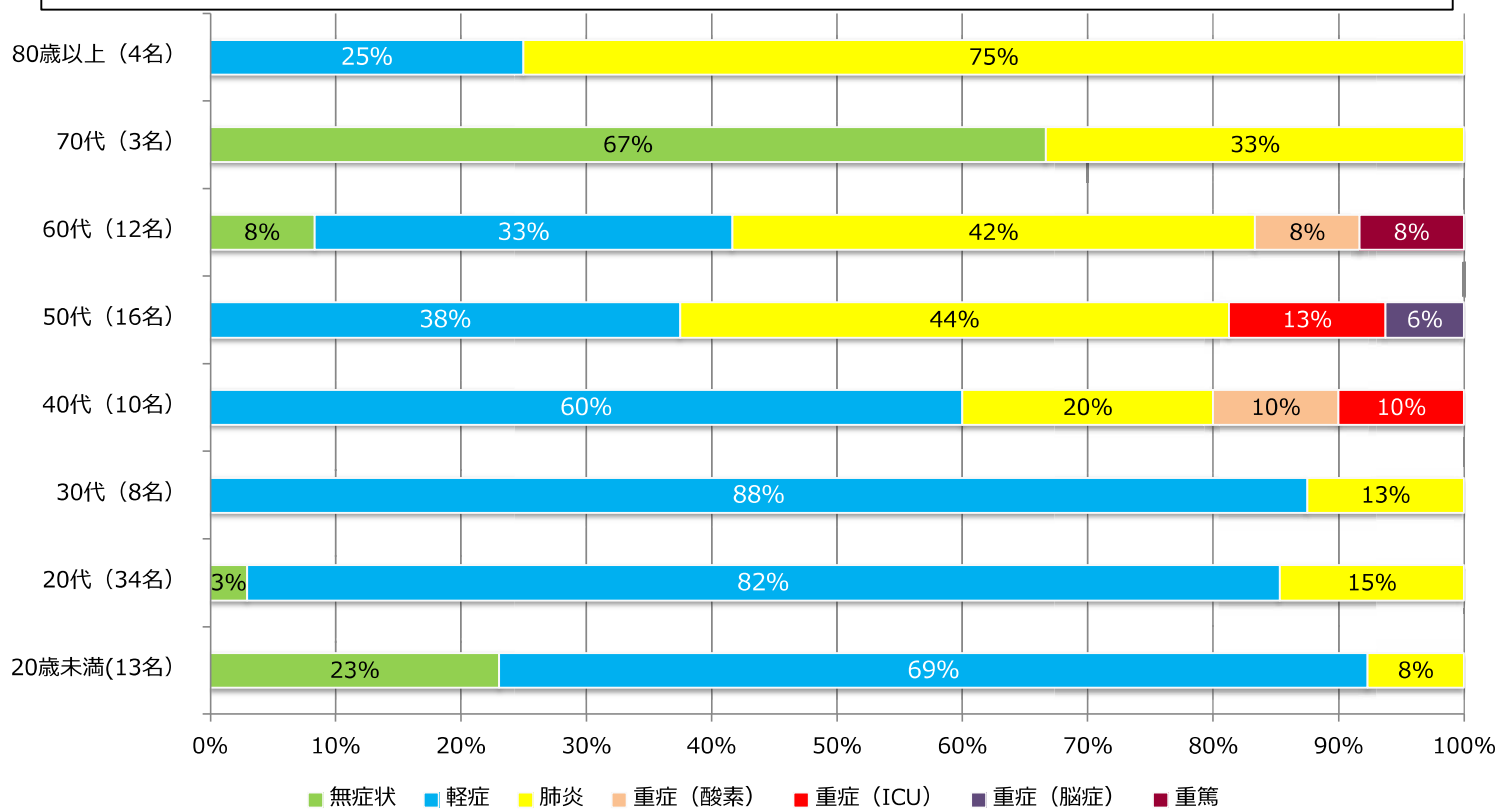


※ 令和2年7月31日までに陽性が判明した者について、8月6日10時時点の状況をもとに作成。  
第二波分については、入院中の者を含むため、今後症状の変化が起こりうる。

感染者の約8割は、軽症～中等症である。酸素投与が必要な重症者は約8%で、ICU管理が必要な患者はこれまで6名であった。死亡者は3名。第二波で感染者が増加する中で、脳症を併発する患者が1名あった

## ⑦ 世代別重症度

- 若年者であっても、入院期間を含めれば、無症状の割合は少なく、肺炎の発症もある
- 中高年層は、肺炎の発症頻度が高く、重症化のおそれもある



※第二波 100名 発症から退院までの症状

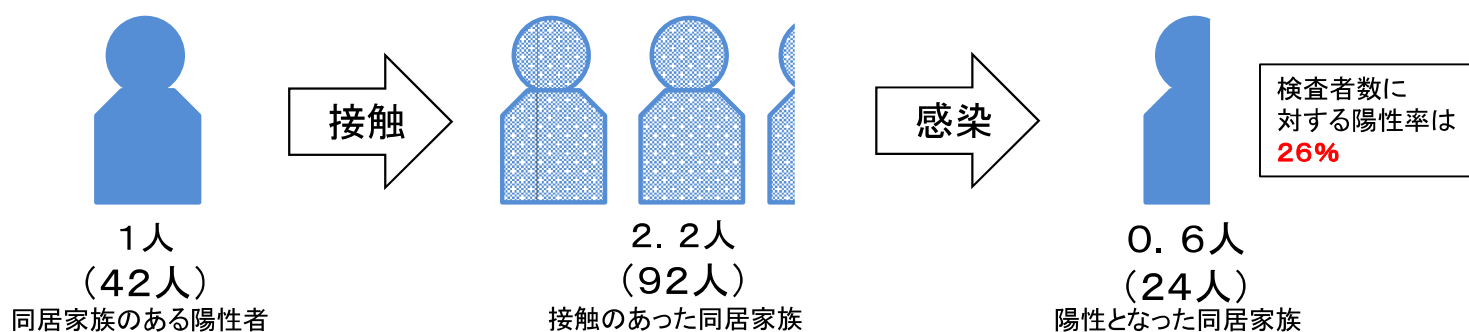


## ⑧ 同居家族内感染の状況

令和2年8月6日までの  
検査で判明した173人を対象

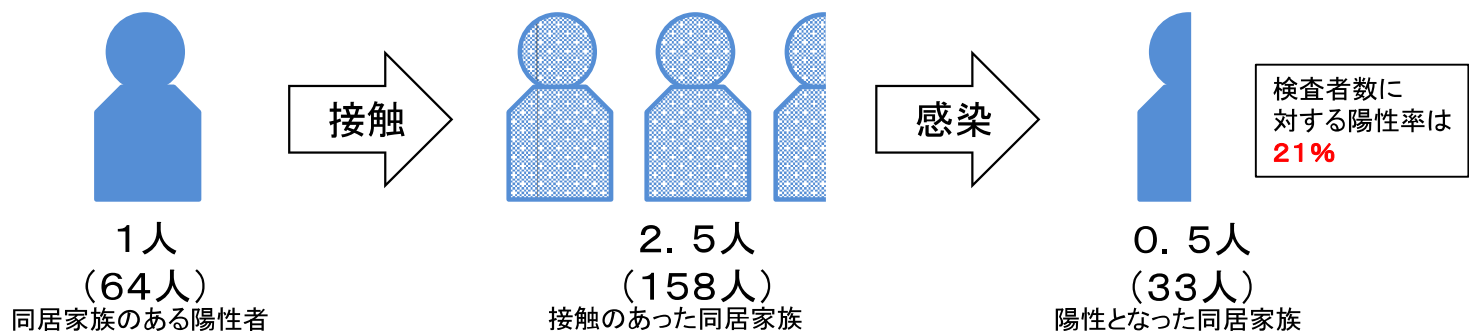
### ① 第一波

同居家族と接触のあった陽性者42人に対し、家族の陽性者24人



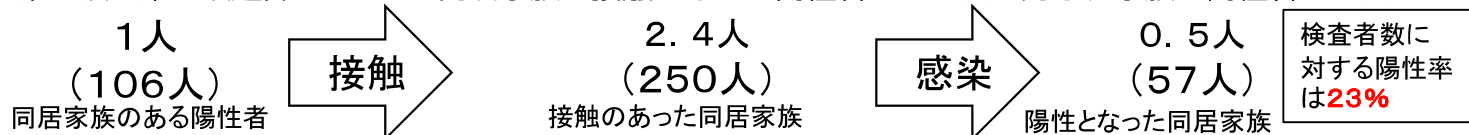
### ② 第二波

同居家族と接触のあった陽性者64人に対し、家族の陽性者33人

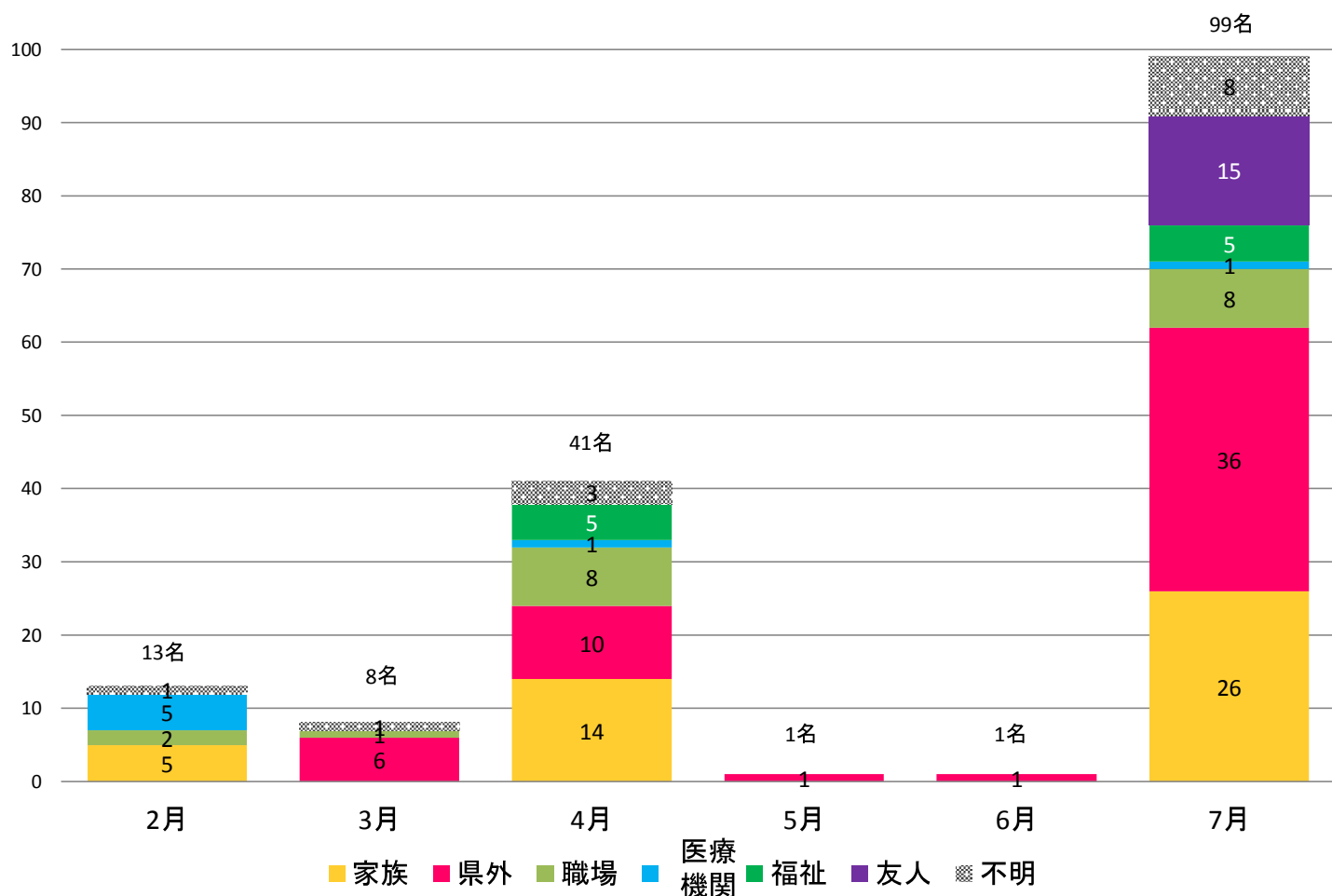


参考：第一波・第二波通算

同居家族と接触のあった陽性者106人に対し、家族の陽性者57人

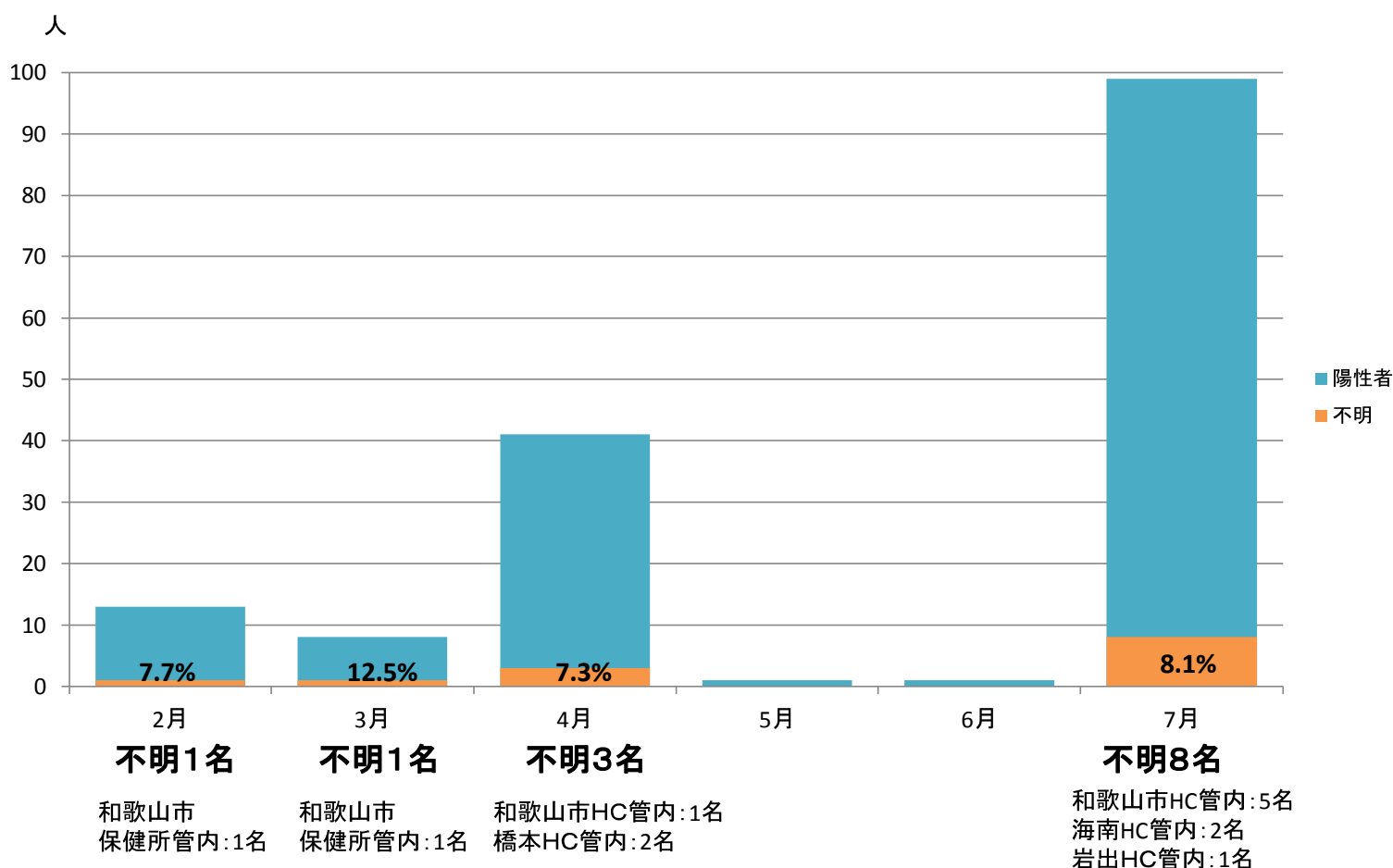


## ⑨ 感染経路



本県では、2月に院内感染で始まり、3月から県外の持ち込みが多くなり、7月に入ってから、県外の持ち込みが最も多くなった。また、若者の友人間の感染が多い状況である

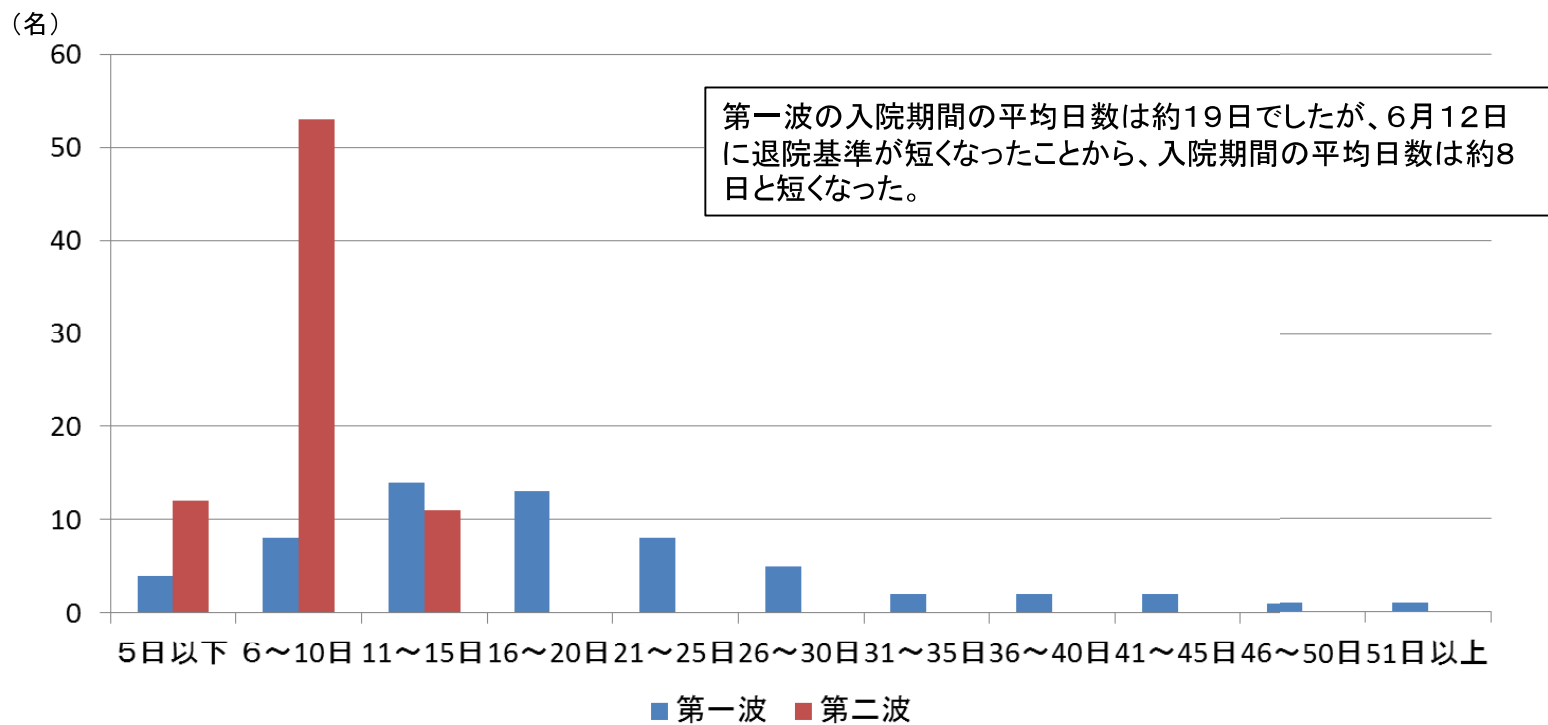
## ⑩ 感染経路（原因不明の割合）



感染経路が不明の割合は、感染者が急増した7月には感染者の8.1%となった。感染経路不明者は紀北地域に見られたが、市中感染が増加している状況ではないと考える

## ⑪ 入院期間

令和2年7月31日までの  
検査で判明した163人を対象



	平均日数	最長日数
第一波	18.8日	55日
第二波	8.1日	14日

※ 8月6日までに退院したものを計上。日数計算において、退院当日を不算入とした。

## まとめ

検査	7月に入り、検査数が増加するとともに感染者も増加したことから、陽性率が高くなった。7月中の検査内訳は、肺炎等疑い患者977名で、濃厚接触者836名であった。第一波では、肺炎等疑い患者1,708名で、濃厚接触者1,815名であった。肺炎像の患者は季節的なこともあり、第一波より少ない。
感染者数	現在は、第二波の状況にあり、首都圏および大阪から人を介して県内への持ち込みによる感染例が急増した。7月31日には、1日の感染者数としては最も多い13名となった。
感染者内訳	第一波では、男女とも50代が中心であったが、第二波では、20代の若者が中心となっている。とくに男性の感染例が多い。
感染者症状	発熱、咳、全身倦怠感が多いが、第二波では、味覚異常・嗅覚異常を訴える方が多い。また、肺炎を併発する方は、感染者の年代が低いこともあり、第一波より少ない。
重症度	感染者の約8割は、軽症～中等症である。酸素投与が必要な重症者は約8%で、ICU管理が必要な患者はこれまで6名であった。死亡者は3名。第二波で感染者が増加する中で、脳症を併発する患者が1名あった。
世代別重症者	第二波では、中年層では、肺炎の併発する割合が高く、重症者が多くなっている。また、若者では、陽性判明当初、無症状でも経過中に味覚・嗅覚異常を呈する例が多い。
家族内感染	一人の感染者に対して、同居家族の濃厚接触者2.4人にPCR検査を行い、二次感染を起こしたのは、0.5人であり、検査者数に対する陽性率は23%であった。第一波と二波では大差がなかった。
感染経路	感染経路が不明の割合は、感染者が急増した7月には感染者の8.1%となった。感染経路不明者は紀北地域に見られたが、市中感染が増加している状況ではないと考える。感染経路として、7月の感染例は県外からの持ち込みが多く、また友人間での感染例が多くなっている。
入院期間	第一波の入院期間の平均日数は約19日でしたが、6月12日に退院基準が短くなったことから、入院期間の平均日数は約8日と短くなった。
ウイルス解析	第二波は、首都圏から大阪に感染が持ち込まれ、または直接、関東に行かれて県内に感染が拡大したとの結果であった。